

今さら聞けない『お盆』の作法

令和元年のお盆月を迎えました。8月の仏教行事と言えば、全国の寺院様で行われる先祖供養の法要、いわゆる『御施餓鬼法要（おせがきほうりょう）』です。富山県は8月13日がお盆の入り、16日が「お盆明け」です。え？富山県は…って事は、他県のお盆の時期って違うの？お盆と言えば、全国的に8月の13日～16日だと思っていたけど、違うの？そう思われる方もおられると思います。今月号では、そんな素朴な問いをまとめてみました。

●【お盆の時期について】

日本には様々な行事がありますが、「お盆」は何時の時期を言うのでしょうか？実は、地域によって時期が違います。東京都や一部の地域では7月にお盆を迎えますが、地方では8月にお盆を迎える事が多いのです。それは「新盆（にいぼん）」と「旧盆（きゅうぼん）」の2通りがあるからです。「旧盆」のことを俗に「月遅れのお盆」とも言います。この「旧盆」が8月13日（迎え日＝盆の入り）～16日（送り日＝盆明け）の事を言います。一方の「新盆」が7月13日（迎え日＝盆の入り）～16日（送り日＝盆明け）となります。

一般的に「お盆休み」と呼ばれる時期は「旧のお盆」や「月遅れのお盆」である8月13日～16日を指しています。そして令和元年の今年は、大型9連休の方もおられるようなのです。8月11日（日）の「山の日」の振替休日で12日（月）もお休みなので、お盆の期間にお休みが取れる場合は、8月10日（土）～8月18日（日）の最大9連休になるようです。お寺は勿論休みはありません笑。

●【迎え火・送り火について】

ここでは、全国的に多い「旧盆」の日取りで考えていきたいと思います。お盆の風物詩でもある「迎え火」と「送り火」で気になる意味や、日にち、言い伝えなどを紹介したいと思います。

お盆期間の「迎え火」は、8月13日。「送り火」は、16日となります。一般的には、盆入りの8月13日の夕方には、先祖の霊が迷わないように、目印として火を焚くお盆の風習「迎え火」を行います。そして盆明けとなる8月16日の夕方、場合によっては15日の夕方に「送り火」を焚いて先祖の霊を見送るとされています。いわゆる、お盆の期間に一緒に過ごした霊を送り出す行事です。

「迎え火」と「送り火」の日程は、地域の風習や家庭によっては、早めに「迎え火」を行って調整する事もあります。一般的な

ご家庭では玄関先で「迎え火・送り火」を行います。ちなみに真成寺では、13日の夕方18時に「迎え火」を、15日の夕方18時に「送り火」を、境内で行っております。どなたでもご参詣できますので、お時間タイミングが合う方は、皆で一緒に送迎いたしましょう。

地域によって様々な風習があるようなので、2、3ご紹介いたします。

東京都などの都市部では、「迎え火」や「送り火」の火を「またぐ」という文化があるようです。焚いているおがらの上を3回またぐことで「病氣から身を守ることが出来る」と信じられてきました。また「迎え火・送り火」を焚くときは、各自の宗派のお経やお題目を唱えたり、地域に伝わる伝統的な言葉を唱えることもあるそうです。

あと「送り火」は、地域の伝統行事として定着している場合も多く、京都市の「五山の送り火」は特に有名ですね。他にも長崎市や盛岡市で有名な灯籠流しや精霊流しも故人の霊を送り出すお盆の風習の1つです。

このように各地で独特の根強い信仰態度が見受けられますが、ただ、各ご家庭で「迎え火」や「送り火」が難しい場合もあります。そんな時は、先祖を想う心を大切に、盆棚の用意や、お仏壇の掃除、お墓の掃除とお参りなど、心を込めて無理なくできることを行えば宜しいかと思えます。

●【初盆・新盆について】

四十九日を過ぎて、忌明け後に初めて迎えるお盆を「初盆（はつぼん）・新盆（にいぼん）」と言い、身内や親しい方を招いて盛大に供養するのが一般的です。初盆・新盆の準備を通して、故人を思い起こします。色々な準備は大変だと思いますが、どんな形であれ、自分達が故人やご先祖様にできる最大限のご供養、つまり感謝の気持ちを伝えることが大切なのです。初盆・新盆は、亡くなってから故人が始めて里帰りする機会です。盆棚（精霊棚）を準備する際には、故人の好物や好きだった花などを思い起こし、故人を偲ぶ時間にしていただければ幸いです。また、親戚の方などから提灯（ちようちん）が届いた場合は、組み立てて、お花などと一緒に飾りましょう。

お盆の準備は大変かと思いますが、年に1度の「命の黄泉がえり」です。故人や御先祖様へ感謝の念を込め、命の繋がりや、人と人との縁を感じる機会にして頂ければと思います。

●【盆棚・お供え物について】

全国の各地方でも、仏壇とは別に盆棚（精霊棚）しよりようだな）を設置される事が多いでしょう。御先祖様の霊を迎える盆棚（精霊棚）は、13日の朝に設置します。お位牌（いはい）を安置し、

そうめんや水、季節の果物や、生前中に故人が好きだった好物などをお供えます。また、ほうずきや栗などを吊したり、笹だけや色紙、五如来幡を飾ったり、ゴザを敷いたりします。

また、お花、ロウソクやお線香などの供養に必要な物を揃えておきましょう。送り日に精霊流しを行う場合は、精霊船(舟)や灯籠の準備も必要ですね。

●【精霊馬や牛について】

キュウリやナスで作る馬や牛は、お盆の風物詩の1つです。正式名称は「精霊馬(しよりりょううま)・精霊牛(しよりりょううし)」と言います。

ナスで作った牛やキュウリの馬が一般的ですが、地域によってはゴーヤを用いたり、ナスとキュウリ以外の野菜を用いる地域もあります。

精霊馬・精霊牛には「御先祖様の霊が牛に荷物を引かせ、馬に乗って行き来する」という言い伝えがあります。また、キュウリの馬は来るとき用の乗り物として、「馬は足が速い動物なので、早く帰ってきてほしい」という思いが込められていたり、一方の牛は、歩みが遅いので、「ナスの牛があつた世へ帰るための乗り物として、ゆっくりあつた世へ帰ってほしい」という名残惜しさが込められているとも言われますね。また牛には沢山荷物を

積むことができるので、お帰りに牛を使つていただいて、お供え物を沢山持ち帰つて頂きたいという思いがあるとか。

と思えば、真逆の意味合いで考える地域もあるようなので、ここにも地域柄が出るようです。いずれにしても、精霊馬と牛は、御先祖様と一緒にお盆を過ごしたいという思いが込められているという共通点があります。

●【御霊供膳について】

正式には御霊供膳(おりようぐぜん・おりくぜん)と言ひ、仏様や御先祖様にお供えする精進料理のことを言ひます。一汁一菜の精進料理をたくさん盛り付けます。精進料理とは、肉、魚、五辛(ごしん)などが入っていない料理のことを言ひます。五辛と言ひるのは、ネギ、ニンニク、ニラ、らつきよう、はじかみ(しょうが)・さんしょう(ご)のことです。肉や魚などを食べると、

仏教における殺生「生きとし生けるものを殺すこと」に繋がり、また五辛を食べると情欲(じようよく)欲に執着する心)や、憤怒(ふんぬ)激しく怒る心)などの煩惱(ぼんのう)を増進させることから、精進料理には入れないのが一般的です。いつも尋ねられる御霊供膳の並べ方ですが、お箸は仏様に向けて並べるのか?それとも、手前の自分の方に向けて並べるのか?正しいのか?ということですが、

仏様側を正面として...手前中央にお箸(はし)。左側に「飯(飯碗)めしわん」。右側に味噌汁(汁碗)しるわん)。中央には漬物(香の物)。左側奥は煮物。右側奥は煮豆や和え物。

つまり御霊供膳は、仏様のお供えです。お膳を置く向きは仏様が召し上がるように、仏壇から正面になる様にお供えするのが正式です。仏様側から見ると、飯と汁物側にお箸を置きます。

仏様と御先祖様にそれぞれお供えする場合は、箸を二膳分用意するのが正式とされています。ご飯は親腕に山盛りに盛り付けて、盛り方はしゃもじで一度すくって、てんこ盛りに盛り付けましょう。

●【お盆の由来とお盆の行事について】

日本のお盆は、仏教の盂蘭盆会(うらぼんえ)に神道の祖先崇拝や、豊作に感謝するなどの農耕儀礼など古くからの様々な風習が合わさって形作られたと考えられています。

「お盆休み」という慣習は、遠い昔、奉公人が主人から休暇をもらって田舎に里帰りする「藪入り」が起源であるという説や、仏教において地獄の看守も休みを取る「閻魔の賽日(えんまのさいじつ)」が、お盆の時期だったことが影響しているという説があります。お盆の風習は地域によって特徴がありますが、全国的な恒例イベントとなつていま

す。長崎の精霊流しや、京都の五山の送り火が有名な例です。盆踊りも、はるか昔にお盆期間に踊つて念仏を唱えていた仏教の行事が由来だと言われています。自分の地域のお盆の風習について改めて見つめ直してみても如何でしょうか。面白い事実気付くかもしれません。

合掌 副住職 谷川寛敬



来月のご案内です

しゅうきひがんえほうよう
◎秋季彼岸会法要 (お講)

九月二十三日(月)

午前十時半

午後一時

お給仕(お講) 当番は、魚津三班の方々です。